研究ノート

東南アジアにおける農村ツーリズム振興

— フィリピン・ギマラス島の事例調査を通じて —

西　川　芳　昭[1)]

1．はじめに

わが国の農林水産省は，グリーンツーリズムを「緑豊かな農山漁村地域において，その自然，文化，人々との交流を楽しむ，滞在型の余暇活動」と定義している。1992年6月に公表された「新しい食料・農業・農村政策の方向」において，「地域全体の所得の維持・確保を図る観点から多様な就業機会を創出するための施策として都市にも開かれた美しい農村空間の形成にも資するグリーン・ツーリズムの振興を図ること」が盛り込まれている。

農村開発の手段としてのツーリズムへの期待が国内外で急速に高まっている。他にこれと言った産業がなく，また伝統的な観光資源を持たない地域においては，農村ツーリズムのような新しい観光開発は地域の雇用を創出し経済を活性化させる最後の切り札として期待されている。このことは多くのアジア諸国に共通しており，政府側からは，都市農村の格差是正の政策的意図が明らかである。すでに，1998年にはアジア太平洋地域の国際機関である食料肥料技術センターの主催で韓国においてアジアにおける農村ツーリズムに関する国際セミナーが開催されている（FFTC 1998）。

1）名古屋大学大学院国際開発研究科・久留米大学産業経済研究所準所員

グリーンツーリズムは，農業・農村の活性化，自然・景観・文化などの農業・農村の多面的機能の保全・都市住民のゆとりある余暇活動を三つの目標としている（宮崎　2002)。産業のセクターとしての農業は日本などの先進国においては大きな比重を占めているわけではなく，アジア諸国においてもその経済的地位は低下している。しかしながら，多くのアジア諸国においては人々の多くが農村部に居住し，農業に関連する就業機会を創出することは地域の活性化に重要な役割を果たす。

しかしながら，安易な観光の導入は必ずしも農業・農村を活性化することはできず，従来からの都市の論理による近代化論の敷衍による農村の崩壊がこれまで以上に進む危険にさらされる。観光を利用して，地域住民が自らの地域づくりの運動が持つ精神面を社会経済効果と同等に重視し，地域の生活・文化を見直し，都市部をも巻き込む開発を実現していくことが望まれる。開発の持続性，内発性を重視する観点からは，ツーリズムの導入においても，地域の行政や組織，そこに生きる人々が地域の自然文化遺産の利用にどれだけ自律的に関われるかという問いが重要となる。

国内においては，グリーンツーリズムを地域住民が主体となって実施，運営する様々な組織形態が研究されており，また韓国・中国との比較研究に基づいて，ヨーロッパ型のグリーンツーリズムとの違いも明らかにされている。しかしながら，東南アジアまで範囲を広げ，また急速な都市化，近代化を同時的に経験している地域としてのアジアの農村ツーリズム研究はいまだ充分には行われていない。

本稿は，フィリピン中部ギマラス島（Guimaras Islands）における農村ツーリズムの形態を事例として分析し，その地域社会・経済における意味づけを行い，今後の地域における農村ツーリズムの立案につなげることが可能な知見を得ようとするものである。

2．フィリピンにおける農村ツーリズム

フィリピンでは，農村におけるツーリズムは一般にアグリツーリズムと呼ばれている[2)]。本章では，フィリピンにおける農村ツーリズム振興の歴史とこれまでのサイト開発についてまとめる。

2—1．政策の概要

フィリピンにおけるアグリツーリズムの概念は，観光から得られる利益を農村地域においても拡がるようにという目的を持って，1999年に観光省によって提案された。観光省から提案を受けた農業省は，観光の農村への導入が，農業セクターの繁栄に役立つとの考えから，アグリツーリズムの実行に関する責任官庁としての役割を分担することとなった（Departments of Tourism and Agriculture in collaboration with University of the Philipines - Asian Institute of Toursim, 2002a）。アグリツーリズムに関する各省委員会（Inter-Agency Committee：IAC）が設立され，観光省，農業省，フィリピン大学アジア観光研究所および観光産業からの代表者がそのメンバーとなった。フィリピンにおけるアグリツーリズムの概念には，観光関連の活動を通じて地方にある既存の農場の収入増加の可能性を最大にするような各種の活動が含まれている。この農場の多様化計画は生計向上，事業および雇用の創出，農業に従事していない一般国民の農場および農場生産物に関する教育の機会を広げることおよび農村景観の保全を目的としている。

アグリツーリズムは，フィリピンにおいてしばしば農場ツーリズム（Farm

2）本稿では，直接フィリピン政府の政策関連文書等を参照する場合は「アグリツーリズム」を使用し，日本の政策や事例に言及する場合は「グリーンツーリズム」を使用する。「農村ツーリズム」はそれらを包括した一般的な用語として用いる。

tourism）とも呼ばれるが，農村コミュニティーの普通の日常生活が観光客に訴える普遍的な魅力に根ざしているとされる。したがって，アグリツーリズムは，実際に活動が行なわれている農場が舞台となり，その活動自体の環境が商品の一部を構成している。アグリツーリズムには，アトラクション，サービスやアメニティーなどが地域の文化とともに含まれている（Departments of Tourism and Agriculture in collaboration with University of the Philipines - Asian Institute of Toursim, 2002b)。地域の住民とのふれあいを通じて，観光客が地域の文化，遺産，伝統などを理解することを意図している。

アグリツーリズムは，小規模な持続可能な観光の一形態である。このような観光の開発によって政府の実施する地域開発の促進に寄与することが期待されている。アグリツーリズムが具体的に目的としていることは，

1．農業に加えて他の経済活動を地域に導入することによって，地域の経済基盤を多様化すること
2．地域に雇用を創出し，失業者に雇用機会を提供すること
3．観光による経済的利益によって，農場を維持しようとする動機を与え，そのことによって地域の景観の維持を図ること

である。

2—2. 農村ツーリズムプロダクト開発とモデル地区

農村ツーリズムのプロダクト開発の実際に当たっては，中央の省庁レベルでは次のような概念が利用されている。すなわち，フィリピンにおいては，伝統的な固有の農産物が生産されており，これらは観光目的に利用されうる。主要なゲートウエイの近くにある農場は教育を目的とした短期間の訪問客を迎える場所として利用できる。動物を飼育している農場も可能性のある訪問先として開発できる。また，政府によるデモファームも観光客の訪問先として開発されている。

アグリツーリズムプログラムは，観光客が訪問した地域の異なる農産物や生産方法について発見することが出来るような農場を訪問したり，典型的な農場の生活を体験したり，また地域の主要な生産物から作られたおみやげ物などを購入することを目的としている。

このプログラムには，具体的な可能性のある観光サイトを選定する評価作業が含まれていた。これらのサイトは，家族経営の場合も，組合経営の場合もまた企業経営の場合もあり，また大学の農場も含まれている。ルソン，ビサヤ，ミンダナオのそれぞれの地域におけるモデルルートの可能性を，観光省が農業省とともに，一定の基準に従って検討した。選定されたそれぞれの訪問先は，地域ごとに一連のパッケージに作り上げあげられた[3)]。これらのコースは公表されており，今後投資者を募ることになっている。

選定された訪問先は，特別な関心を持った旅行者向けの商品に構成される場合もあるし，通常の観光のオプショナルツアーやサイドトリップとして利用される場合もある。したがって，それぞれの訪問先の，ゲートウエイや既存の主要な観光地との近接性は重要な選定基準となる。

3．ギマラス島における農村ツーリズム

本章では，まず本稿で事例として取り上げるギマラス島の概要を紹介し，次に2004年に策定されたギマラス観光マスタープラン（Province of Guimaras and the Department of Tourism 2004）のなかから農村ツーリズムに関する事項をまとめる。最後に，実際に訪れ，インタビューを行ったオロベルデ（OroVerde）農場について紹介する。

3）ルソン島のタガイタイルート，ミンダナオ島のブキノドンルートの詳細については，西川（2004）を参照。サイトとしては，ほかに中部ルソン大学（Central Luzon States Unicersity）が選定されている。

3—1. ギマラス島の概要

ギマラス島は，フィリピン中部西ビサヤ地方のパナイ島の南東，ネグロス島の北西に位置する面積605km² 人口約141,000人の島である。パナイ島およびネグロス島からいくつかの航路が結ばれている（写真１）。1992年にパナイ島の州から分離して，一島一州の島となり，現在５つの町（municipality），96の集落（barangay）からなる。主要産業は農業であり，稲，ココナッツ，カシュー，マンゴーおよびカラマンシーが主要生産物である。カラマンシーは，主に島にあるトラピスト修道院の僧侶が栽培している。マンゴーのジュース工場およびサトウキビからの製糖工場も島にある。

各省委員会はルソン島の中部ルソン大学，ミンダナオのブキドノン地方と並んでビサヤ地域からはギマラス島を農村ツーリズムのモデルサイトとしており，西ビサヤ地方の開発計画（Physical Framework Plan）においても，農村ツーリズムをギマラス島開発の有効な手段と指摘している。

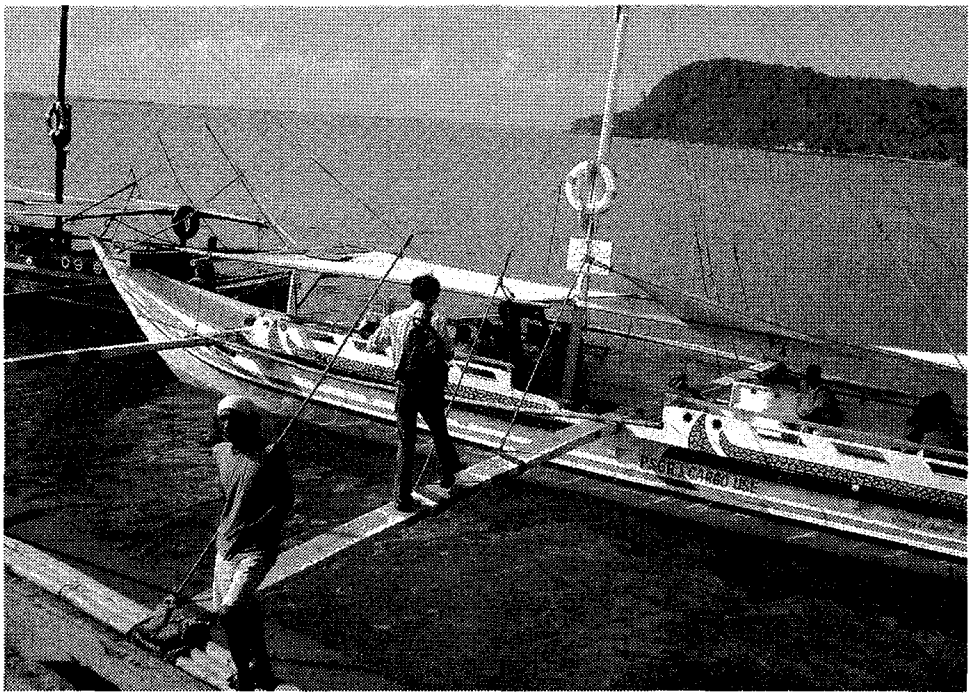

写真１　ギマラス島とパナイ島を結ぶボート

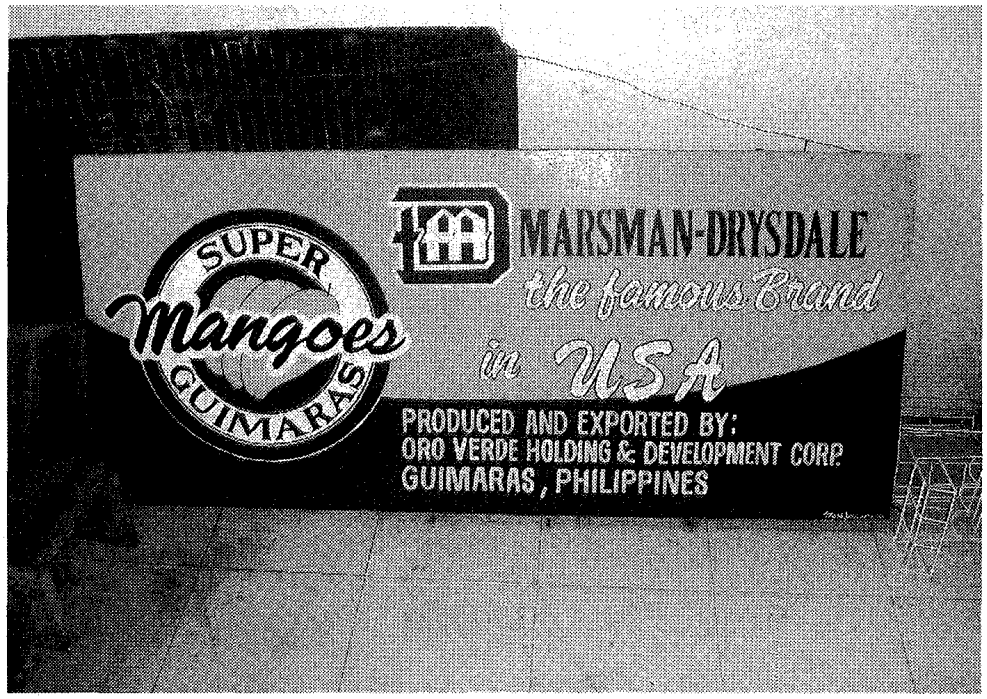

写真2　アメリカにマンゴーを輸出しているオロベルデ農場

ギマラス島の農業において特筆すべきことは，フィリピン中で唯一ギマラス島のみがそのマンゴーをアメリカ合衆国に輸出できることである。日本やオーストラリアの市場向けにはルソンやミンダナオ産のマンゴーも輸出されているが，アメリカ向けには検疫上の理由でギマラス産のマンゴーのみが輸出されている（写真2）。したがって，農村ツーリズムのサイトとして触れる農場を傘下におくMarsman-Drysdale GroupのほかにもDel MonteやDoleなどの大手食品会社が，土地を所有するまたはリースする[4]，あるいは仲買人を通じてでもギマラス産のマンゴーの確保に努力している。

3—2. ギマラスにおける観光開発

一般的な観光地としては，1903年に米軍が建設したBuenavista桟橋，湧水で

4）リースする場合は最長30年で行われ，土地代が所有者に支払われるが，生産に関するすべての責任は会社側が負う。ほかに，share cropの方法（会社側70%・農家側30%が標準）で契約している例もあるが，この場合も実質的に生産に必要な資材はすべて会社側から提供される。

有名なDaliran Cave，沖合いに散らばる島嶼群のSiete Pecadosなどがある。ほかに古い教会であるBala-en Bukid Shrineが中心の町ジョルダン（Jordan）にある。お祭りとしては，Ang Pagtaltal sa Guimarasという地方色のあるキリスト受難劇が見られる。島の南端にはフィリピン大学ビサヤ校によって鳥の保護区および海洋生態保護区が設定されている。

島を訪れる観光客の数は，統計を取り始めた2001年の78,777人から2003年には123,998人に増加している。そのほとんどはフィリピン人であるが，英語学習のためにパナイ島に滞在する韓国人やヨーロッパ・アメリカからの観光客も増えており，2003年には1,569人の外国人が島を訪れている。観光マスタープランによると，今後観光客の数はフィリピン人が毎年20%，外国人が毎年10%ずつ増加し，2008年にはおおよそ300,000人の観光客が訪れると予測されている。現在までにビーチを利用したいくつかの宿泊施設が整備されている（写真3）。

ギマラス島地域観光開発マスタープランでは，農村ツーリズムの振興がギマラ

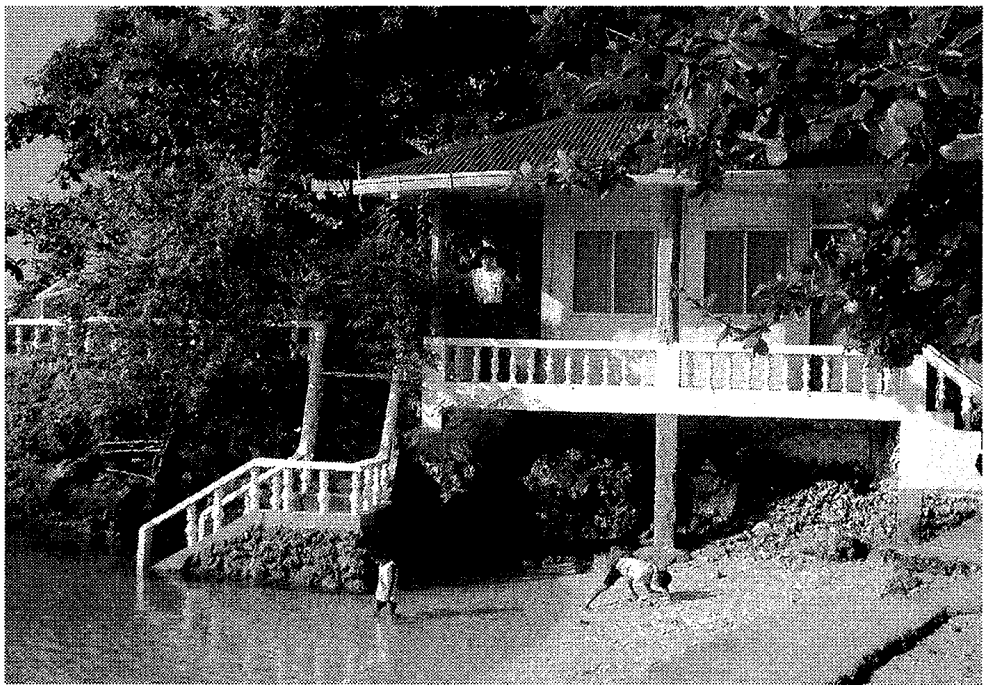

写真3　ギマラス島の曲型的宿泊施設

ス島の観光開発戦略としてもっとも適しているとされている。その理由として，すでに多くの農場が余暇，レクリエーション，教育活動を農業環境の中で提供していることが挙げられている。このような既存の農場施設を選び，適切に活用することが島の観光開発戦略の重要な要素として認識されている。ここで，強調されていることは，農村ツーリズムの導入によって土地利用の様式が変わるのではなく，あくまでも観光の導入によって，地域の農業の価値が付加され，農民の収入増加につながることが目的とされている。

具体的な観光コースとして，中心の町であるジョルダンを中心に島を周遊するコースが設定されている。その際に，対象となる農場は以下のような基準によって選ばれている。第一に，近代的なものであれ伝統的なものであれ農場において農業生産の活動が行われていること，

第二に，小規模な自給農業ではなく，商業的に生産している農場を優先すること，なぜならば生産物が農場および市場に加えて観光客にも提供できることが望まれるからである。

第三は，車の入れる道路に面していること，

第四は，農場がある程度の広さがあり，かつ土地利用に余裕があり，観光の要素を持ち込んでも農業生産が阻害されないこと。3 ha ぐらいの農家が適当と考えられている。

第五には，今回の農場周遊には主に陸上の施設を対象として，沖合いの養殖漁場などは含まないこと。農場の内容は，果樹園（マンゴー，カシュー，かんきつなど）のみならず，その他の経済作物（野菜，サツマイモ，稲など）を含む。

第六には，農村ツーリズムの要素を意図的に提供できることである。具体的には，生産物の提供もあるが，農場の活動や生活そのものが主たるアトラクションと考えられる。

そのほかに，交通や医療へのアクセスの容易性，水道や電気の確保なども選択

基準として評価される。

このような基準を中心に，10ヶ所（8ヶ所が農場，2ヶ所が島内の養殖池）がモデルサイトに選択され，そのうち8ヶ所の農場をつないで周遊コースがマスタープランの中で提案されている(図1参照)。筆者らの調査では，そのなかから養蜂場，マンゴー研究センターを訪問したが次節ではマンゴーの生産と輸出を行っているオロベルデ農場について描写する。

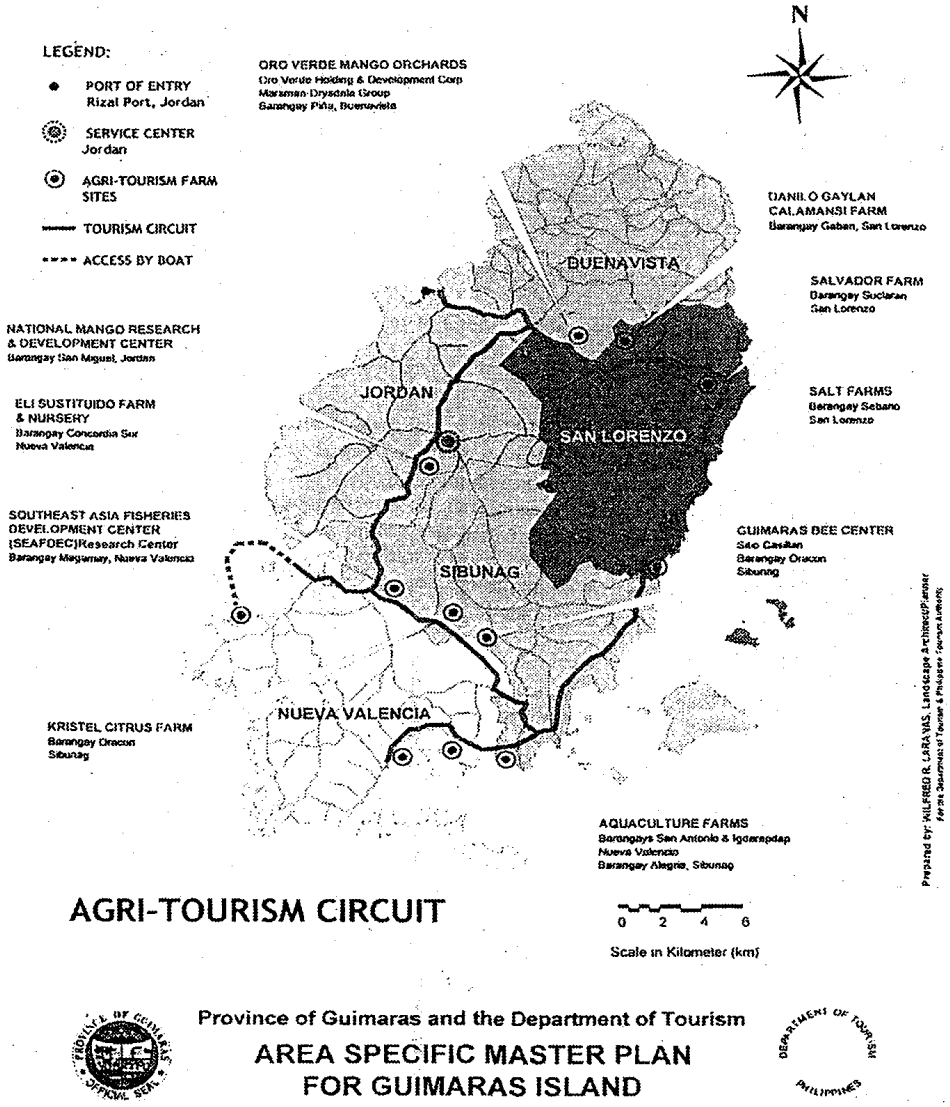

図1　ギラマス島観光マスタープランに基づく農村ツーリズムサイト
（出典：Province of Guimaras and the Department of Tourism 2004）

3—3. オロベルデ（Oro Verde）農場

オロベルデ農場は農作物輸出を行っているMarsman-Drysdale Groupの系列会社であるOro Verde Holding and Development Corporationが所有する面積約240haのマンゴー農場である。農場は起伏に富んでおり，また農場内に水路や川があるために多様な生態系が存在し，実際にマンゴー以外に稲の栽培も行っている。また，牛を飼うための牧草地や養殖池の運営も手がけている。養殖池の水は稲作や乾期のマンゴー灌漑にも使用されている。訪問客は主要道路に面したビルの中にある農場管理事務所で簡単な説明を受け，農場内の見学ができる。収穫期には，訪問客は自ら収穫体験が出来，また袋かけの季節にはギマラスの労働者が竹のさおにつかまってマンゴーの高い木になる実に袋をかけていく様子を観察できる。収穫体験した果実は農場の出荷価格で観光客に販売される。また，農場内のゲストハウス（関係者用），集荷施設，ガレージなどの見学もできる。

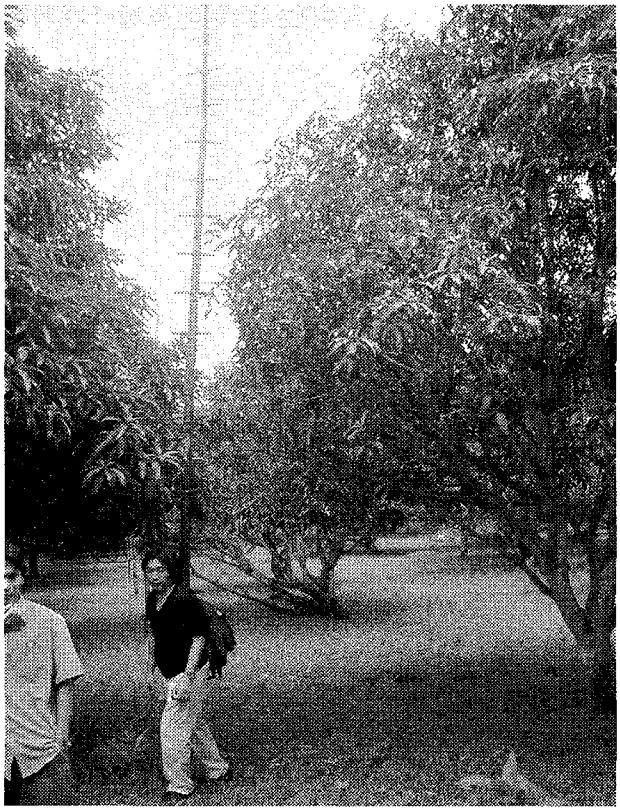

写真4　ギマラス島のマンゴー生産果樹園

管理事務所には農場の観光に対するモットー[5]が掲げられており，教育的活動も意識されている。2005年に入ってから受け入れた観光客は9月末（29日）までで850人で，そのうち55人が外国人であった。これらの観光客に応対する専任の案内役は雇用しておらず，一般の広報担当が交代で訪問者の接客に当たっており，また，それらの担当者は観光省や州の観光担当部局の実施する研修を受けてはいない。

写真5　樹齢百年以上といわれるマンゴーの古木

3—4. ギマラスにおける農村ツーリズムの評価

今回の調査では，限られた期間内に限られたインフォーマントに対するインタビューと資料収集で行ったこと，ギマラスの主要産物であるマンゴーの開花および収穫時期ではない農閑期における調査であったことなどから，必ずしも充分な情報収集が行われたわけではなかった。したがって，限られた情報を基にしてではあるが，ギマラス島における農村ツーリズムの特徴として当面次のようなことが言えよう。

5）世界最高水準の生食用および加工用マンゴーを生産し，農場全体を多様性豊かな農業生態系として開発し，農場地域一帯を州のエコツーリズムプログラム振興を支援する形でローカルなエコツーリズムサイトとして開発すること，とされている。（agri-tourism ではなく，eco-tourism という用語が使用されている。）

第一に，行政側（マニラの観光省およびギマラス州政府観光セクション）の意識としては，主要な農場を中心としつつも，コミュニティー（バランガイレベル）の参加を前提とした面的なツーリズム開発を計画しており，モデルルートの提案を行っている。しかしながら，2ヶ所の港から出入りをした範囲では，実際にはそのようなツーリズムは，少なくとも観光客の目に留まる形では提示されていない。

第二に，州政府の観光セクションが，オフィスに隣接して特産品の売り場を設置して，観光客らに購買を促している（写真6）。また，政府が，バランガイレベルおよび学校レベルを対象とした観光に関する研修を実施しており，観光開発を受け入れる準備（レディネス）は整えられつつある可能性がある。一方で，オロベルデ農場で聞き取った限りでは，既存の観光客受け入れ施設を対象とした研修は行われていない。

第三に，ギマラスの観光資源がマンゴーであるという観光関係当局の認識に対

写真6　州経済事務所の建物の中にあるおみやげもの屋

して，たとえばOroVerde農場のマネージャーは，マンゴーを中心とした複合農業と，池などを含めた景観が，ギマラスの農村風景であることを主張しており，観光関係の行政当局と実際の農村ツーリズムの提供者との間で地域資源に関する認識の差が見受けられた。また，検疫上の問題から，ギマラスにはマンゴの種，苗，果実等の持ち込みは一切禁止されており，港でひとり一人の上陸客の荷物検査が行われている（写真7）が，このような検査そのものが観光アトラクションになりうることは州の観光担当者も気づいていなかった。

最後に，ツーリズム開発の本筋からは外れるかもしれないが，一方でフィリピンにおける農業農村開発の抱える大きな問題が今回の調査でも明らかになった。それは，フィリピン政府が推進している農地改革プログラムとその他の開発政策との整合性である。OroVerde農場では，マンゴーのプランテーションだけではなく，牧畜や養魚もそのなかで実施しているが，その表向きの目的は，農場の環境の多様性および物質循環の促進である。一方で，牧畜（牧草を含む）や養魚池

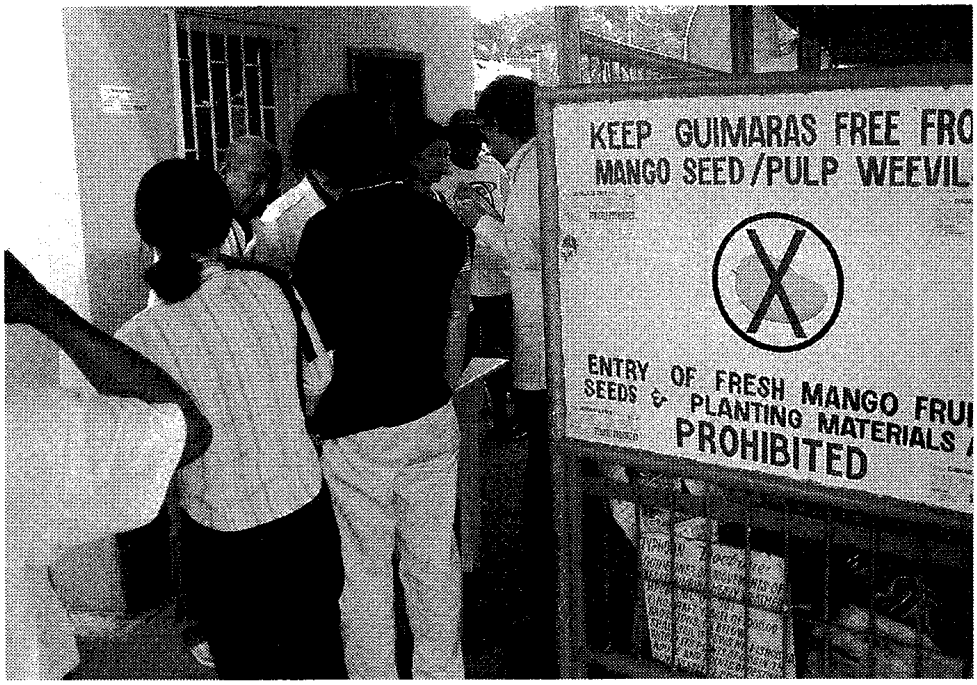

写真7　上陸客の荷物の中にマンゴーが入っていないかの検査を行っている

は農地改革の対象から外れることも隠された目的であると考えられる[6]。さらに，マニラの観光省が農業省と協議した結果，OroVerde 農場を農村ツーリズムのモデルサイトとしたことにより，観光省から農地改革省に対して OroVerde 農場を農地改革の対象からはずすこと（exemption）を要請するレターが提出されている。農村ツーリズムが思わぬところに波及していることが明らかになった[7]。

地域資源の持続的な利用に関しては，農山漁村を単に作物や家畜を生産し，漁を行う産業空間として捉えるだけでなく，地域内外の住民がやすらぐ交流空間，農林漁業・農村が持つ教育力を意識した教育空間・地域内外の高齢者が生産やコミュニティー活動に積極的に参加できる生きがい空間，歴史文化空間及び景観保全空間としての利用も意識されるべきである。この地域空間の多面的理解の促進にツーリズムは重要な役割を果たす。このことは，政府レベルの観光関係者には認識されており，研修プログラムの中にも若干含められているが，実際の観光開発の中には充分には具体化されていない。

農村ツーリズムを，ギマラス島のような地域の開発のツールとするには，都市部からの観光客の流入及びそれに伴う産品の販売を最終的な目的とするのではなく，地域に住む住民が，地域にある農業の固有の価値を理解し，利用，継承していく手段として工夫することが期待される。開かれた地域主義（守友　1991）を確立するためにも，農村における観光を積極的に展開し，外部者のまなざしを入れることは重要である。しかしながら，ギマラスのマスタープランにみられるように，地域が持つ農業・農村の価値や魅力を一義的にマニラの中央省庁担当者や研究者のような外部者が評価するのではなく，地域住民が自らを取り巻く空間の

6）農場マネージャーからの非公式聞き取りの結果に基づく
7）州政府観光担当者からの聞き取りに基づく。加えて，農業省関係者が匿名を条件に話してくれたことであるが，「小作人や農業労働者に配分された土地の多くが，その直後に転売されることが多く，プランテーション農場のいくつかが行うような，配分後の土地所有者とのリース契約のほうが，コミュニティーにとっては意味がある」という見方もある。

意味を評価することが必要だと考えられる。その意味で，州の政府がマスタープランの実施に当たってバランガイや学校を対象として行っている研修の中に，地域資源の認識に関するモジュールが含められていることは評価できる[8)]。

4．おわりに

食料肥料技術センターのセミナーにおいては次のような問題点が指摘されている（FFTC 1998）。第一に，ツーリズムに参入する農民のほとんどが，ツーリズムに必要なマネージメント技能を持ちあわせていないことである。したがって，具体的に事業を起こすこと，認可の申請を行うこと，事業のコミュニティーにおける影響などについて評価を行うことが出来ないことが多い。第二はマーケティングの問題である。多くの場合，農村ツーリズムの施設は小規模で分散しており，多くの観光客をひきつけることは困難である。第三には，自然が豊かな農村地帯は一般に道路や鉄道などのインフラ整備が遅れており，観光客が訪れにくくなっている。都市生活者は，休暇を過ごすために出掛けるのに貴重な時間を移動時間に費やしたいとは思っていないと考えられる。第四は，観光シーズンが限られることである。ピークシーズンが限られることは，年間の受け入れ人数を多くすることを困難にするとともに，投資に対する利益を大きくすることが困難となる。第五は，農家は観光客が何を望んでいるかについての十分な情報を持ち合わせていないことが多いことである。

このことは，フィリピンの農村ツーリズムの開発においても中央政府レベルでも州政府のレベルでも充分認識されている。このような状況に対して，アジアに

8）州政府観光担当者からの聞き取りであるが，具体的にマンゴー以外の地域資源についてどれだけ触れられているかは明らかにできなかった。歴史遺産や景観など，今後の課題であろう。

おける先進地とされる韓国やわが国の経験からどのようなことが言えるだろうか。

宮崎（2002）は，わが国とならんでグリーンツーリズムが推進されている韓国について，「個人経営による観光農園がグリーン・ツーリズムの中心施設であり，団体旅行を主なマーケットとしているのが特徴である。」と指摘している。観光農園を中心とした施設が，多様化・個性化・高度化する都市住民の農村観光に対する要求にどのように応えつつ，観光農園自体の経営活性化と地域の活性化をどのように結び付けていくかが今後の課題とされている。フィリピンの場合，公務員の慰安旅行や教育を目的とした団体旅行を意識して作られている商品開発の実効性も課題である。

さらに宮崎（2002）は，日本のグリーンツーリズムの最大の特徴として地域経営体の運営による施設の多さを指摘している。地域のメンバーの運営による地域経営体を中心に受け入れ態勢を整備しており，このような地域経営型のしくみが，生産に偏った農業の考え方を多面的機能をも含む農村生活全体から位置付けた地産地消と食農文化の確立を村づくりの目標として，その実現のために地域農業とグリーンツーリズム産業の連携による地域農業の総合力の発揮につながるとしている。フィリピンにおいては，政府がコミュニティ開発の構成要素として農村ツーリズムの導入しようとしている一面あるにもかかわらず，実際には企業農場や観光農園がアグリツーリズムの提供者として主流となっており，地域にとっての波及効果は現時点では大きなものとは言えないと考えられる。今後，農地改革が進み，農地が農場労働者や小作人に所有されるようになった場合に，どのような農場ツーリズムが推進されるべきか早急に検討する必要があろう。

【後　記】

本稿は，2004年度国際協力機構国民参加型事業を利用してアジア・グリーンツーリズム・ネットワークが実施したフィリピン政府農漁省の農村ツーリズム担当者

招聘事業[9]および2005年度アジア経済研究所プロジェクト「日本の地域産業振興の経験と開発途上国への教訓」のギマラス島における現地調査の結果の一部を基にしている。調査結果の速報は2005年12月4日に開催された日本観光研究学会全国大会において口頭発表をしている。ギマラス島の調査は2005年9月29日から30日にかけてアジア経済研究所吉田健太郎氏，JETROマニラセンター米山洋氏とともに実施した。調査に協力してくださった，フィリピン政府農業省農村ツーリズム担当Zenida Viellagas氏，Eliza Junio氏，観光省農村ツーリズム担当者Gina Maria Nieves氏，西ビサヤ地域事務所担当者Rene Cortum氏およびギマラス州政府関係者に深く感謝する。また，オロベルデ農場のマネージャーGodfredo Peralta氏には長時間にわたるインタビューに答えていただいた。調査および情報収集の機会を与えてくださった各機関，各位に感謝する。ただし，本稿の内容の責任はすべて筆者にあり，上記各機関およびそれらの関係者の見解・意見を代表するものではない。

【参考文献】

駄田井正・奥山忠政・西川芳昭　2005　アジア・グリーンツーリズム・ネットワーク第8回大会報告　産業経済研究　45巻4号　123-256

Departments of Tourism and Agriculture in collaboration with University of the Philipines - Asian Institute of Toursim, 2002a Guide Book for Developing Agro-tourism in the Phillipines

Departments of Tourism and Agriculture in collaboration with University of the Philipines - Asian Institute of Toursim, 2002b Directory of Agriculture Based Festivals

Food & Fertilizer Technology Center (FFTC) 1998 Rural Tourism A new source of farm income for Asian farmers, http://www.agnet.org/library/article/ac1998b.html

宮崎　猛　2002　これからのグリーン・ツーリズム　ヨーロッパ型から東アジア型へ　社団法人家の光協会　247p.

9) この事業はアジア・グリーンツーリズム・ネットワーク第8回大会へのフィリピン代表招聘として実施された。報告の詳細は駄田井・奥山・西川（2005）を参照。

守友裕一　1991　内発的発展の道　まちづくりむらづくりの論理と展望　261p.
西川芳昭　2004　東南アジアの農村ツーリズム　夏秋・板垣編　『離陸した東南アジア農業』所収　農林統計協会　127-148
Province of Guimaras and the Department of Tourism 2004 Area Specific Master Plan for Guimaras Island